



企画・取材・発行  
射水商工会議所 魅力発信プロジェクト  
(事務局) 射水商工会議所  
〒934-0011 射水市本町2-10-35  
TEL: 0766-84-5110

発行日  
2016年2月10日

# 新湊 街道 さんぽ



## 引用・参考文献

- 「新湊市史」新湊市史編さん委員会
- 「しんみなとの歴史」新湊市
- 「越中の偉人 石黒信由 改訂版」射水市新湊博物館 編
- 「万葉集探訪」西宮正泰 (文芸社)
- 「越の海と文芸」久泉迪雄 (新湊市民文庫 8)
- 「奈呉の浦の移り変わり」小川貞雄 (新湊市民文庫 14)
- 「港湾をとまなう 守護所・戦国期城下町の総合的研究 -北陸を中心に-」仁木宏 ほか
- 「いみずの神社・寺院」射水地区広域事務組合
- 「新湊内川まち歩き絵図」NPO法人水辺のまち新湊

## 協力

射水市、射水市教育委員会、射水市新湊博物館、射水市観光協会、  
観光ボランティア・あゆの風、河合雅司

## 制作

株式会社 ワールドリー・デザイン

## 表紙の 写真

### 京都と東北をつなぐ浜街道の要所 三ヶ新の道標

「越後出羽道」と書かれた道標は、安政6年(1859)に立てられたもの。ここは京都方面と東北方面の重要な三叉路でした。方向を指差す手に当時流行の元禄袖があしらわれたおしゃれさと、『←京都、現在地、新潟・東北→』という現代ではあり得ないざっくり、ダイナミックな位置表示にご注目を。



内川周辺の旧街道を味わう。

様々な文化の行き交う  
名残と記憶に  
ふれる旅へ

「浜往来」の名残を感じさせる松の切り株と地藏堂。昔は荒屋から練合までの間に33体の観音様が安置されていたそうです。今も点在する石仏の脇には、立派な松の木があります。

放生津八幡宮と地藏院の間の道。この先には海があります。松尾芭蕉もしかしたら歩いたかも知れません…。

江戸時代まで追分の三叉路にあった「三角茶屋」のご子孫が明治時代に場所を移し始めた「料亭 三角」。現在はまちの中心部（立町）で、新湊ならではの海鮮を使った郷土の懐石料理が楽しめます。

# 歌人や詩人のように、 感受性全開で歩け!!

## 多彩な人々、様々な文化が行き交った重要な道

富山県射水市 新湊地区。古くから人口と産業の集積地として栄え、県内で最古の都市ともいわれています。新湊地区の放生津や六渡寺と、その他の町々を結ぶ「越中浜往来（＝浜街道）」は、富山湾に沿って延びる主要な道として、室町時代以前より多くの人々が行き交ってきました。万葉の時代には歌人・大伴家持が、戦国の時代には多くの英雄たちが、そして江戸時代には俳人・松尾芭蕉が、この地を旅しました。彼らは様々な歌や逸話を残し、それらは今でも地元の人々に語り継がれています。

当時と今を比べれば、海岸浸食などにより道筋は変わり、路面は舗装され、街道沿の松並木もほとんどなくなり、風景はずいぶん変わってしまいました。しかし、眼前に広がる海や自然は、昔と変わらない圧倒的なスケールで、今の私たちに迫ってきます。

また、この風土とともに生きてきた人々や歴史との出会いは、新鮮な感動を与えてくれるはずです。さあ、感受性を解き放ち、想像力の翼を広げて、この道を歩いてみませんか。歌人や詩人のように、感じたことを書き留めながら…。👤

## 内川周辺の街道の特徴

### ①歴史上の人物たちとの交流

大伴家持、源義経 & 弁慶、松尾芭蕉、伊能忠敬…。歴史の教科書でもおなじみの人々が、この道を通りました。ただ「通った」だけではありません。この土地ならではの風景や人との出会いや、交流のあった形跡が残されているのです。

### ②地層のように重なる歴史・文化

古くから漁業や海運業などの産業・商業が集積してきた海洋都市では、様々な人やものの交流が、豊かな歴史・文化の土壌を作ってきました。さらに、大伴家持や足利義材、宗良親王など、この地に数年間留まった人々が、都のきらびやかな文芸・文化をもたらし、その土壌がさらに豊かに耕されました。一見してはわからずとも、何か「ただならぬ雰囲気」を感じるの、重層的な文化の厚みを知らず知らず感じ取っているからかもしれません。

### ③一時「幕府」があった歴史の舞台

室町時代、足利義材はこの放生津で、国家の政治を動かしていた時期がありました。わずか5年の短い間ではあったものの、政治を実行していた中心の場所が、ここにあったという事実は、とくに異彩を放っています。

### ④渡し船も重要な「道」の一部

陸路ばかりではなく、川を横切る渡し船の航路も、昔の街道の一部です。古くから多くの人々が、その水辺の風景に旅情を掻き立てられてきたことでしょう。

### ⑤詩歌、文学…。ドラマが残っている

大伴家持がこよなく愛し、よく詠んだ「奈良親王（の海）」の歌。それ以後、国内の名所旧跡のひとつとして、歌枕となり、様々な歌人や詩人、作家たちが、その情景に思いを重ねてきました。いつの時代も、この地の風土や人々の営みが、アーティストたちの感動と表現欲をかき立ててきたのです。



用語解説 富山湾沿いの大動脈 越中浜往来(浜街道)

越中浜往来は、中世の頃にはすでに主要な街道として、様々な人・ものが行き交っていました。今の富山新港は富山湾とつながっていますが、昔は「放生津潟」と呼ばれ、海岸沿いは地続きでした。西は、「六渡寺の渡し」を越えて氷見方面へ、東は岩瀬、黒部などを越えて東北地方へとつながる、海沿いの大動脈でした。



浜街道と松並木 原風景 (射水市新湊博物館提供)

背景の地図：『射水郡見取絵図』石黒信由作 ((一財)高樹会蔵)

“越中の伊能忠敬”と呼ばれた石黒信由が、1808年に加賀藩から命じられて作った絵図。町や村、道筋、河川などの位置関係が分かります。

- 射水郡見取繪圖
- 青色、海川、瀉
  - 赤色、山
  - 朱色、筋、道
  - 麓台、富山御領、婦
  - 此印 五十ヶ村
  - 此印 三十ヶ村
  - 此印 五十ヶ村
  - 此印 五十一ヶ村
  - 此印 五十三ヶ村
  - 此印 四十七ヶ村
  - 此印 三十七ヶ村
  - 此印 四十六ヶ村
  - 此印 四十六ヶ村
  - 此印 高田、放生
  - 此印 高田、放生
  - 此印 高田、放生

# 越中浜往来周辺の変遷

大伴家持、越中国守在任

義経&弁慶が通過

宗良親王が滞在

足利義材が滞在

松尾芭蕉が通過

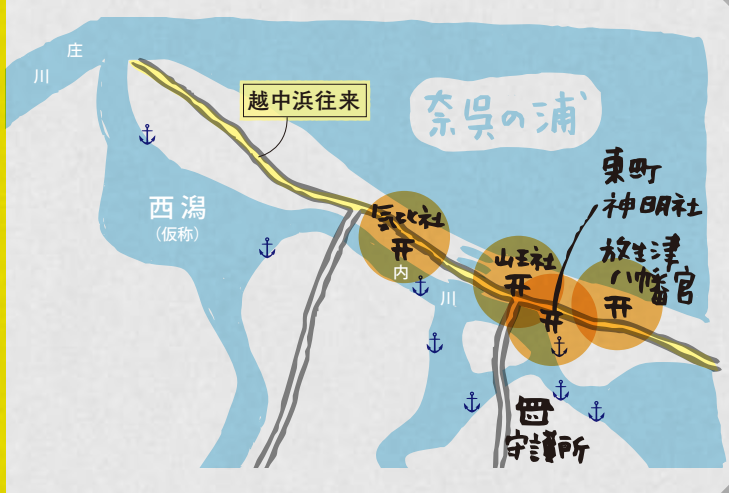
伊能忠敬が訪問

2016



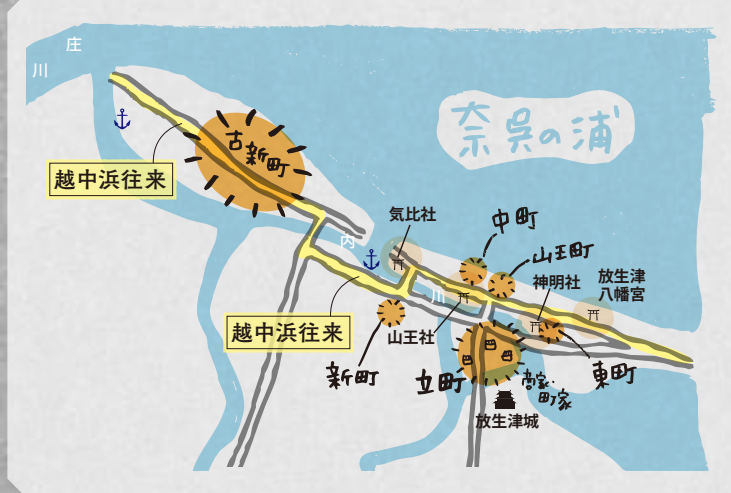
## 1. 13世紀後半～14世紀前半ごろ

国府と守護所があった時代。気比社、山王社、神明社、放生津八幡宮の4つのお宮を中心に、神社や寺院の門前町が広がっていたと考えられます。



## 2. 14世紀中頃～16世紀初頭ごろ

守護所は放生津城に。足利義材(14・15ページ参照)を支えたという放生津城を中心に、武家屋敷などが広がっていたと考えられています。



## 3. 16世紀後半～17世紀ごろ

17世紀の初めに廃城となった放生津城の周辺は商家や町家が広がります。次々に新しく町立てされ、賑わいが増します。松尾芭蕉(12・13ページ参照)が訪れたのもこの頃。水辺によって昔の道が遮断されたため、内川より内陸部にある道の一部が浜街道となりました。

放生津エリア

越中浜往来写真館



大正初期：放生津八幡宮脇の通り

大正13年：浜街道と松並木

昭和7年：放生津八幡宮のある東町通り

昭和8年：浜街道と松並木

戦後(昭和20年代ごろ)：浜街道と松並木

昭和38年：奈呉の浦

# 水門風

寒く吹くらし奈呉の江に  
 夫妻よび交わし 鶴さはに鳴く

—— 大伴家持 万葉集卷十七・四〇一八



## 用語解説

富山湾のことを昔はこう呼んだ  
**奈呉の浦** なごのうら

写真は、放生津八幡宮の裏手にある石碑。今は道路が通り、植林され、海岸線がずいぶん遠くになってしまいました。今はこの石碑のあるところから海を臨むことはできませんが、60年ほど前まで、ここから海が見渡せたそうです。

## 富山で歌を詠みまくったアラサー時代

おおとの やかもち

# 大伴家持 Yakamochi Otomo

奈良時代の貴族・歌人。生まれは718年頃といわれています。大和朝廷以来の武門の家に生まれ、祖父・安麻呂、父・旅人と同じく高級**官吏**として6代の天皇に仕えました。三十六歌仙の一人であり、『万葉集』の編纂に関わった歌人として有名。

29歳の時、**国守**に任じられ、少納言となり帰京するまでの5年間、越中国で過ごしました。その間、**出挙**を円滑に行うために**巡行**した越中国内の各地で多くの歌を詠みました。家持の歌は『万葉集』全歌数4516首のうち473首を占めており、万葉歌人中最多。異郷の風土に接した新鮮な感動を伝える歌が、多く詠まれました。785年没。



### 絵解き関連用語解説 家持 Words

#### かんり 官吏

国家公務員。高級官吏は現代で言えば高級官僚(中央省庁で局長や事務次官クラスにある人)のこと。

#### こくしゅ 国守

現在の県知事に裁判長と警察署長、消防署長を兼ね合わせた、その国の最高権力者。

#### すいこ 出挙

稲の種のみなどを貸し付け、秋に利息とともに返還させる、古代の税金徴収&農業生産推進システム。

#### じゅんこう 巡行

国守は、出挙で貸し出した稲のチェックと住人たちの監督のため、年に一度国じゅうを視察しました。

### まんようしゅう 万葉集 から思い巡らす

天皇から防人まで。様々な身分の人の歌が集結！  
 日本人の哲学や考え方が凝縮された最古の和歌集

『万葉集』とは多くの「言の葉」=「歌」を集めたという意味があるといわれている。全20巻・4516首の中には、天皇や歌人などの貴族の歌のほかにも、「防人の歌」「東歌」などの民衆の歌が載っており、古代の日本人の感性や考え方を知る上でもとても重要な資料である。様々な歌の中でも際

立って多いのが、家持の歌だ。家持が詠んだ473首のうち、なんと220首が越中国で詠まれたもの。さらに、家持の部下たちが詠んだものや、越中に伝わる歌を加えると337首にのぼるそう。家持以来、越中は万葉のゆかりの地として、様々な歌人たちが憧れ、愛する場所となっている。



家持ゆかりの放生津八幡宮には、歌碑がいっぱい！ (→次ページ参照)



越の海の 信濃の浜を 行き暮し  
 長き春日も 忘れておもへや

— 大伴家持 万葉集 卷十七・四〇二〇

家持ゆかりの惣社

ほうじょうづはちまんぐう

放生津八幡宮

Hojozu Hachimangu Shrine

746年、奈呉の浦（現在の富山湾）の情景を愛した大伴家持が、豊前国宇佐八幡神を勧請して奈呉八幡宮と称したのが起こり。第65代宮司は大伴泰史さん。宮司のお名前からも、脈々と引き継がれて来た家持の所縁を知ることができます。境内には創建した大伴家持を祀る「祖霊社」があります。毎年8月には「祖霊社祭」が開催され、公募により集まった家持を顕彰する短歌・俳句の優秀作品を、表彰・奉納しています。



Point 1

家持が  
創建した  
神社

Point 2

裏手に  
奈呉の浦  
の石碑

Point 3

家持の  
おみくじ  
も！

コロンとかわいい、  
家持さまのおみくじも。



奈呉の浦を感じる、海の「道」へ

県営渡船 越の潟発着場

けんえいとせん  
こしのがたはっちやくじよ

Koshinogata Ferry

1967年、富山新港の建設に伴って、分断された鉄道と道路を結ぶため開設されました。2012年に新湊大橋が開通し、再び放生津潟の両岸が繋がりましたが、学生や高齢者の大切な足として、今も引き続き運行されています。家持が詠んだ「奈呉の浦」の面影を想像しながら乗船するのにも一興です。

Point 1

万葉線に  
接続して  
いる

Point 2

「道」代わり  
だから乗船  
無料！

Point 3

地元民と  
ふれあえる  
かも！

奈呉の海の  
沖つ白波  
しくしくに  
思ほえるかも  
立ち別れなば

— 大伴家持 万葉集  
卷十七 三九八九

早稲の香や 分け入る右は 有磯海

用語  
解説

北陸を代表する名所の歌枕

**有磯海** ありそうみ

大伴家持が弟の死を知り、悲しみの中で詠んだ歌(※)がきっかけで生まれたのが「有磯海」という言葉。家持のいた越中国府は高岡市伏木にあったので、放生津から見える海のことも指していたと思われます。その後、時代を経て富山県から見える海全体を表現する言葉として、意味が広がってきました。

※「かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波もみせましものを」

Point 1

荒屋神社  
に解説つき  
句碑あり

Point 2

放生津  
八幡宮にも  
句碑あり

Point 3

県内唯一!  
同じ地域に  
句碑が2つ!

シーズンオフにやってきた  
日本史上最高の俳諧師

まつお ばしょう

**松尾芭蕉** Basho Matsuo

芸術性の極めて高い句風を確立した、日本史上最高の俳諧師。1644年、現在の三重県伊賀市に生まれました。29歳で初の句集を奉納したのをきっかけに江戸へ行き、職業的な俳諧師となりました。1689年、弟子の河合曾良とともに、古の歌人たちの巡った名所旧跡を辿る『おくのほそ道』の旅に出ました。江戸～東北～北陸～岐阜までの約150日間の旅程で詠まれた50句のうち、県内で詠まれたのは「有磯海」の入った1句のみ。本当は氷見まで行きたかったけれど、猛暑の中、難所を越えて疲れていた芭蕉はその句を詠んで金沢に向かったのです。



曾良の日記  
から思い巡らす

本当は氷見の藤が見たかった芭蕉。でも真夏じゃムリ。

『おくのほそ道』の旅に随行した河合曾良の日記に、富山県内の旅程が詳しく記されている。芭蕉らは、黒部川を始めとした黒部48ヶ瀬と呼ばれる多くの川を、猛暑の中越え、夕方に滑川に到着後1泊する。翌日も猛暑で、富山には寄らず常願寺川・神通川・庄川を渡り、高岡市へと旅を続けたが、

猛暑の中の強行軍であったため、疲労困憊の2人。本当は「藤波の影成す海の底清みしずく石をも玉とぞ吾が見る」と家持が歌に詠んだ「担籠の藤波（現在の田子浦藤波神社）」を見たかったようだが、藤の見頃は春。その頃は真夏…。残念ながら氷見方面へは行かず、金沢へ向かったようだ。



解説付きの、芭蕉の句碑がございます

あらやじんじゃ  
**荒屋神社** Araya Shrine

1914年、地元の俳人・南呉州が建立。貴族院議員で公爵の二条基弘に依頼して書いてもらった碑文は、都から遠い名所が忘れ去られないようにと、『万葉集』の「奈呉の浦」と『おくのほそ道』の「有磯海」はどちらもここで詠まれたものだと紹介しています。「早稲の香～」の句碑は県内各所にあります、解説付きは珍しいです。



心あひの  
風の名にあふ  
扇かな  
——宗祇

※神保長誠のもとで詠んだ句



用語解説 数々の歌人に詠まれてきた言葉  
**あひの風** あいのかぜ

「あいの風」「あゆの風」「あえの風」とも。春から夏にかけて、東・北東から吹く風のこと。海を荒らす激しい風ですが、豊作や豊漁などの前兆といわれています。地元ならではの方言も家持によって万葉集に歌われ、雅な言葉に昇華されて以来、数々の歌人たちに詠まれてきました。

諸国を巡り歩いた連歌師

そうぎ

宗祇 Sogi



1421年生まれ。かの芭蕉も影響を受けたという、連歌界の第一人者。

1473年以降は、公家、将軍、各国の大名などとの交友を深めました。1479年以来、9回にわたって越中に立ち寄り、歌を残している宗祇は、義材の滞在中にも放生津を訪れています。江戸時代以降、放生津周辺で流行した「前句(舞句)」も、宗祇の時代にもたらされた文芸の影響を受けているそうです。

義材の凛々しい騎馬像が拝める！

ほうじょうづばし

放生津橋 Hojozu Bridge

内川にかかる橋。室町幕府10代将軍・足利義材の騎馬像と座像のブロンズ像があります。華やかで個性的な橋の中では一見地味な方なのでスルーされがちですが、実はかなりの見応え。「放生津幕府」の説明もあるので、歴史探訪の際には必ず抑えておきたい場所です。

Point 1

歴史探訪  
マスト  
スポット

Point 2

足利義材の  
凛々しい  
騎馬像

Point 3

放生津幕府  
の説明も  
あり！

越中・放生津に「幕府」を開いた!?

室町幕府第10代将軍

あしかが よしき

足利義材 Yoshiki Ashikaga

1466年生まれ。24歳で、10代将軍に就任。前将軍・義尚の遺志を継ぎ、大名征伐のため京都を留守にしている間に、伯母や従兄弟からクーデターを起されてしまいます。幽閉後、島流しになるところを脱出。救ったのは、支援者の一人で放生津に拠点を築いていた畠山氏の重臣・神保長誠。当時27歳の義材は逃亡中とはいえかなりの力があり、放生津で政権(「放生津幕府」)を樹立しました。約5年の放生津滞在中、義材のもとを京都の歌人らが頻りに訪ね、歌会も多く催されました。義材は、越中の芸術・文化の振興・発展にも大きく貢献したのです。



梅花無尽蔵  
から思い巡らす

地方の武将も詩歌や文芸に親しむようになった時代

義材の放生津滞在中には様々な歌人が訪れ、幾多の歌を残しています。室町中期の禅僧・万里集九(1428~)もそのひとり。『梅花無尽蔵』という彼の作品に義材の敬われぶりを伝える歌が残されている。「…将軍を護らんとし、皆、神と仰ぐ。」(将軍をお護りしようと、地元の武将たちは、義材を神のように敬っている。)と。これは、神保長誠の一族の古老・小坂凝清が、「自分のために歌を作ってほしい」と請うたためにできたもの。歌は小坂翁を賛美して終わっているが、これにより、当時の武将たちも、詩や歌を尊重し、求めていた一面を垣間みることができる。

ここに  
日本の中心があった!?

ほうじょうづじょうし

放生津城址

Ruins of Hojozu Castle



放生津小学校の地下には、放生津城の遺構が残っています。太平記に登場する鎌倉時代の越中守護所であり、室町時代には義材を支えた神保氏が、守護である畠山氏に代わり入城しました。グラウンドの脇の石碑が、ひっそりとその歴史を伝えています。



放生津城想像図(射水市新湊博物館提供)

ありし日の放生津城に思いを馳せる

にのまるばし

二の丸橋 Ninomaru Bridge

内川にかかる橋。放生津城の二の丸にちなんで名付けられました。放生津小学校の生徒たち考案のデザイン。





日本の正確な地図を作り上げた測量家

いのう ただたか

## 伊能忠敬 Tadataka Inoo

1745年、現在の千葉県に生まれました。佐原の名家・伊能家に婿入りし、酒造業などに商才を発揮し、実業家として成功しました。49歳で家業を長男に譲って隠居。50歳を機に幼い頃から興味があった天文学を勉強するため高橋至時入門。1800年から、17年間で、日本全国の測量に旅立ちます。日数は3,753日、歩行距離は実に4万km！忠敬が放生津を訪れたのは1745年、58歳のときの第4次測量。幕府公認の事業とはいえ身分が明確でなかったため、当初の加賀藩では「幕府の隠密かもしれない」とかなり警戒していたようですが、越中に入る頃には協力的な姿勢に変わったそうです。



忠敬と信由が出会った場所  
しばやあと

### 柴屋跡 Old Shibaya site

山王町公園の東側は、柴屋彦衛門の家の跡地です。忠敬をはじめ8名の測量隊が宿泊しました。この時、忠敬一行に出された夕食の献立の記録が残っています。地方色豊かな食事で当時としては豪華なものでした。

御菓子：御所落雁（越中・井波の落雁）  
焼物：塩鯛 お汁：白味噌・ふかしくずし（柔らかい蒲鉾）、松茸、針牛蒡 なます：鯛、大根、きくらげ、京花、のり、針生姜  
香物：なら漬、瓜、塩茄子  
平：きんこ（鱈の卵）、ほどき卵、わさび 御飯 抹茶



「落着き弁当」／（株）道の駅新湊

北陸が誇る和算・測量家

いしく のぶよし

## 石黒信由 Nobuyoshi Ishikuro



1760年越中国高木村（現在の射水市高木）生まれ。23歳で富山藩士・中田高寛に入門し、和算を修得。また、自ら工夫・改良した器具を使って測量を行い、数々の正確な地図を作製しました。1803年、58歳の忠敬が測量の旅で放生津の柴屋彦衛門宅に宿泊しているところを訪ねた信由は、忠敬の天体観測を見学させていただきました。翌日は富山湾の沿岸測量に同行。信由の『測遠用器之巻』には、忠敬との出会いや珍しい測量道具について詳しく記されています。一度きりの出会いでしたが、信由の測量人生に大きな刺激と影響を与える出来事だったことでしょう。



『測遠用器之巻』石黒信由著（一財）高樹会蔵

南朝勢力の遊撃手的存在!?

むねよししんのう

## 宗良親王 Muneyoshi shinno

1311年生まれ。後醍醐天皇の皇子。母が歌道の家出身であったため、幼い頃から和歌に親しんできました。南北朝の争いが激しくなる中、足利尊氏に対抗すべく南朝の勢力を拡大するため、1342年から約2年の間、新湊（放生津・牧野）に滞在しました。



宗良親王の船着き場跡  
ふじのみやしんめいしゃ

### 藤ノ宮神明社 Fujinomiya Shinmei Shrine

藤の木が植えられたのでこの名前に。1342年、宗良親王が上陸したといわれる場所の跡にある神社です。



奥州・平泉へ落ち延びる際に通った

みなものよしつね べんけい

## 源義経と弁慶 Yoshitsune & Benkei

源義経とその忠実な家来・弁慶は、源頼朝の迫害を逃れ奥州へ向かう途中、「如意の渡し（六渡寺の渡し）」に乗船しようとするが、渡守に見破られてしまいます。弁慶の扇で義経を打ち据えるという機転で、無事乗船し、逃げ延びたという話があります。



弁慶が義経に謝った場所といわれる  
なごのはやし

### 奈呉の林 Nago no Hayashi

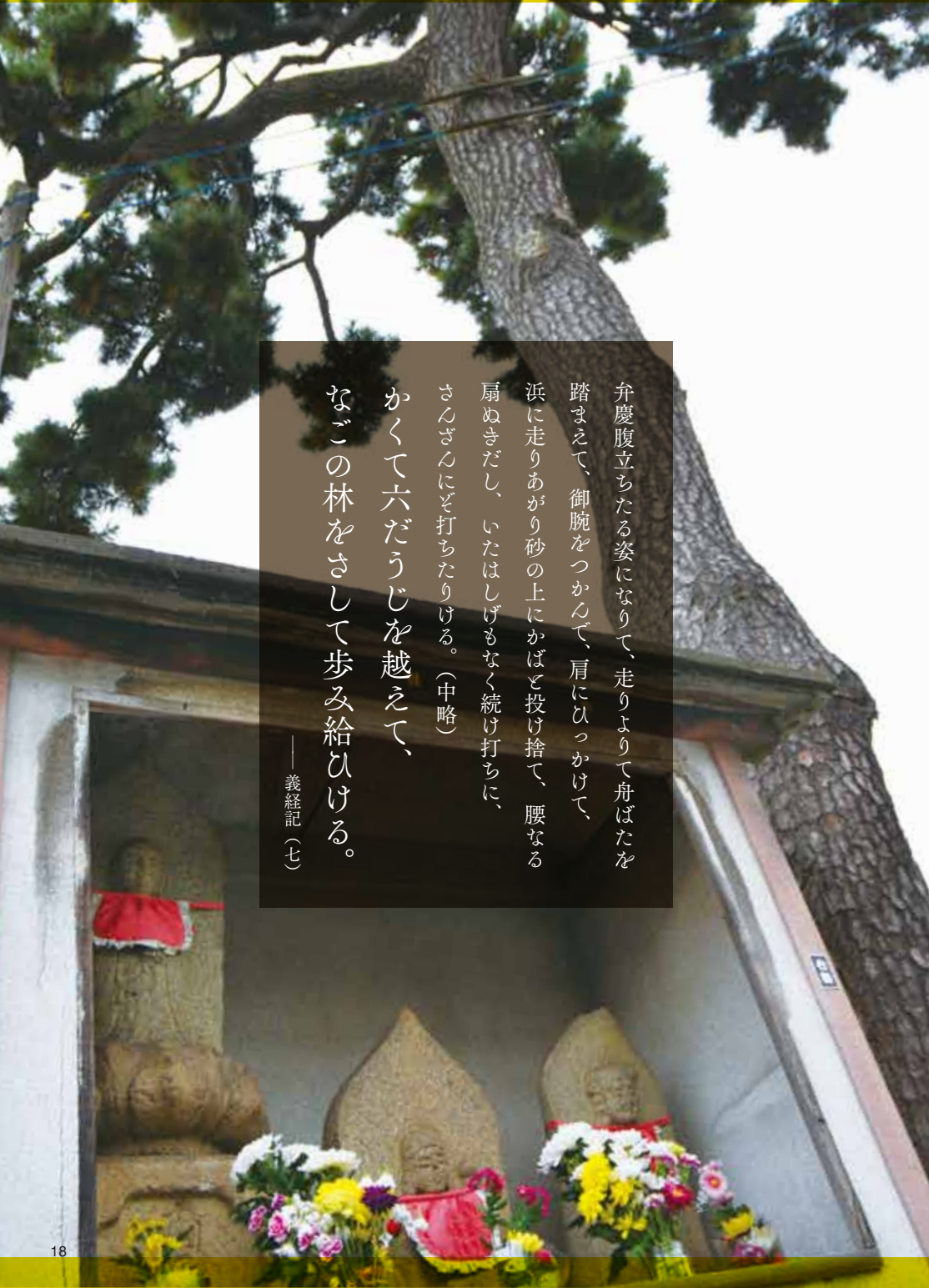
「六渡寺を越えて、奈呉の林を指して歩み…」という記述が『義経記』に出てきます（次ページ参照）。渡し船で、主人の義経を打ち据えるという非礼を、弁慶が泣いて詫言った場所は、渡し船から少し歩いた、富山湾の見える松林だったとも言われています。



（大正5年ごろ）

（現在）  
浜往来に  
今も残る  
松並木

上の写真：射水市教育委員会提供



弁慶腹立ちたる姿になりて、走りよりて舟ばたを  
踏まえて、御腕をつかんで、肩にひっかけて、  
浜に走りあがり砂の上にかばと投げ捨て、腰なる  
扇ぬきだし、いたはしげもなく続け打ちに、  
さんざんにぞ打ちたりける。(中略)  
かくて六だうじを越えて、  
なごの林をさして歩み給ひける。

— 義経記(七) —



## 33観音をチェックせよ！ 観音様から思いを馳せる 在りし日の浜街道の風景

様々な歌や物語に登場する奈呉の松原。立派だったであろう松並木は、ほとんどが枯れたり伐られたりしましたが、越ノ瀧エリアには今でも、昔の浜街道の名残がちゃんと残っています。  
見つける方法は簡単！ 荒屋から練合までの約5kmの間に一定の間隔で安置されていた33体の観音様


をたどってみましょう。観音様のそばには松の木や松の切り株があります。風雪に耐えて来た松が数本並んでいるところもありますよ！ 観音様は当時の場所から移動している場合もありますが、立派な松と観音様から、往時の浜街道の姿を感じることができでしょう。

### 木曾義仲 & 巴御前も通った




1183年5月9日、5万余騎を率いた木曾義仲軍は、六渡寺に宿営。翌10日には浜通りを西へ進み、家臣の今井兼平率いる別働隊と合流したという話があります。

### 前田利家 & 佐々成政が宴会!?



明智光秀が謀反を起こし、織田信長が討たれた本能寺の変。利家と成政はこの知らせを、上杉軍と戦って攻め落としたばかりの魚津の地で受け取りました。急いで船で七尾城まで帰ろうとした利家は途中大風に遭い、海老江明神浜に避難。そこから放生津に移った利家のもとに成政が馳せ参じ、互いの無事を祈って宴を催したそうです。

### 親鸞が立ち止まり、休んだ場所が!



鎌倉時代、浄土真宗を開いた親鸞も浜往來を通りました。奈呉の浦の松林に親鸞の腰掛けた松や袈裟を掛けた松があったようですが、今は松並木もほとんど見ることができません。新湊大橋を渡った東側の堀岡、海老江方面にも、親鸞の逸話が残っており、「足洗瀧」は、親鸞が足を洗ったという言い伝えが名前の由来になっています。



# 新湊街道さんぽMAP

※地図上の●(緑色の丸)は、奈呉の松林の名残と思われる松。

※地図上の●(黄色い丸)は、この一帯に約150あると言われている「おんではん(地藏堂)」の位置です。

※地図上の①~⑨は、荒屋〜練合の間にあったという33観音の場所を示しています。数字は御堂に貼られた番号札、複数の観音様が合祀されている場合はその数も表示。

！ 歴史ヒストリアチーム、とっておき！  
もっと街道を楽しむ方法



何百年、千年以上前にこの地を歩き交った人々。彼らの記録は現存する作品や物語、書状などからたどることができますが、その殆どは数行程度のシンプルなもの。どんな出会いや会話があったか、どんな思いを抱いたか…。記録に残っていないからこそ、ロマンがあります。どんどん妄想しながら歩いてみましょう。

例えば、「〇〇跡」で見つけた小石や松並木の名残の木などの小さな発見に、想像力をプラスしてみましょう。石ころから、在りし日の石垣や城を思い浮かべてみたり、一本の木から見事な林や森を想像したり…。どんな小さな発見にも、古くて新しい世界とつながる、大発見のカギが隠されていますよ。きっと。

歩きながら、ふと思ったことをメモしたり、旅の記念に一句詠んでみましょう。古くから親しまれている5・7・5・7・7のリズムに言葉を乗せれば、不思議とまわりの風景や出来事がドラマチックになります。行き交った歌人たちの気持ちにも近づけるかもしれません。上手い下手は気にせず、まずはチャレンジ！

新湊歴史ヒストリアチーム  
リーダーの  
一句&一枚



浜街道と一部並行して流れる内川は、映画「人生の約束」「あなたへ」や月9ドラマ「恋仲」のロケ地で熱いスポットとなっています。曳山祭りの日、映画のロケ中だったのか!? 湊橋辺りからスポットライトで照らされた内川が美しく、思わずシャッターを切りました。時間をかけて散策するとこの様な場面に遭遇したり、車で走っていても気づかない所も発見できて楽しいですね。

年々に変わらぬ梅の匂いこそ

老いせぬ春の挿頭(かざし)なりけり(足利義材の作)。優雅な歌を詠む義材、実は剣の達人でした。永正6年(1509)寝込みを襲った忍者集団をひとりて撃退しています。こんな歴史秘話も知りたい方は、浜街道を歩く前に、博物館を見学しませんか。常設展示で放生津や浜街道の歴史を紹介。この本片手に展示も現地も数倍楽しめます！

協力  
松山 充宏



射水市 新湊博物館 定休日 火曜、祝日の翌日  
所在地 射水市鏡宮299 TEL 0766-83-0800  
開館時間 9:00~17:00 (入館~16:30)

万葉の歌を訪ねて 旅をする

大伴家持や松尾芭蕉の頃は、どんな風景が広がっていたのでしょうか？トキや鶴が飛んでいたのでしょうか。奈古の浦は、岩場が広がっていたのでしょうか。それとも、広大な砂浜だったのでしょうか。私達は、その風景と同じものを見ることができません。でも、万葉の歌や史跡から想像を広げる事ができます。この冊子を片手に、さあ歴史と想像の旅にでましょう！

弁慶の涙が匂う 松林

安宅の関での伝説は、実は如月の渡しであつたということが、単なる言い伝えではなく義経記に書かれていたとは驚きです。歴史上の人物が見た、感じた新湊はどんなところだったのでしょうか？偉人を通して地元を見直してみると、弁慶の涙のおいまで想像できて不思議な気分になりました。

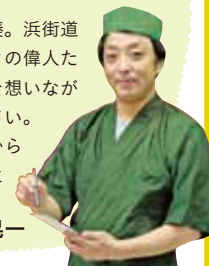
魅力発信  
プロジェクトリーダー  
八嶋 祐太郎



「いにしえ」が歩いて香る みなとまち

県内最古の都市といわれる新湊。浜街道を通して、歴史に名を残す数々の偉人たちが訪れました。そんなことを想いながらまちなかを歩いてみてください。コケだらけの石垣も、小道脇から見える古木も、立派な文化財に見えてきます。

事務局  
島倉 晃一



あとがき 超時空スイッチあります 浜街道

古くは大伴家持の奈良時代から伊能忠敬&石黒信由のいた江戸時代までの約千年を遡りながら、今と比べていて気づいたことがあります。漁業をはじめ海を生業とした暮らし、それによって培われた歴史・文化が今も脈々と続いていること。一方で、ものや人の交流が最高潮だった頃に活躍した場所は昔と同じ状態ではほとんど残っていないこと。風景や人々の暮らし、心の持ちようが時代とともに移り変わって行くのは当然の理。でも、この地域にある根本の精神は、千年以上前からずっと変わっていないのだらうと思います。

松尾芭蕉は「不易流行」といいました。基本を学ぶのは大切だけれど新しさも追い求めなくちゃいい俳句はできない、と。今に残っている古き詩歌には、心を開放し感動・衝動の湧き上がるまま詠んだその時の風景や気持ちを知るスイッチが忍ばせてあるようです。また、昔の人々の歩いた道にもその「超時空スイッチ」は隠されているようで、時代を越えて飛んで来た矢に歩きながら心を射抜かれるようなドラマチックな気持ちを何度か味わいました。不変と革新を知る小さな旅、本当に面白いです！

撮影・デザイン・編集：明石あおい

！ さらに深く楽しむために…  
地元ガイドさんに聞こう

新湊地区 観光ボランティア

あゆの風

新湊エリアの観光地を案内してくれるボランティアグループ「あゆの風」。内川周辺散策や観光船遊覧などのコースが用意されています(案内は要予約)。青いベスト(夏は水色のTシャツ)が目印！見つけたら声をかけてみて。フランクかつハイテンションに歓迎してくれますよ♪

